

△邯鄲▽小考

樹下好美

△邯鄲▽では、シテ盧生の求道の旅という設定が、物語世界の枠組みの中でなされている。現在判明している限り、典拠としての邯鄲説話には仏教色はない。ただし、盧生が旅の目的地とする、高僧の居る「楚国の羊飛山」は出典未詳であり、典拠との関係については後考が待たれる。ここでは、香西精氏の「求道の士」としての盧生像に脚色者の特色を見る御指摘（△邯鄲―作者と本説、『能謡新考』所収）、伊藤正義氏の「盧生を一大事の因縁（仏道）を志す者として設定すること」を△邯鄲▽独自の構想の一環とされる御指摘（新潮日本古典集成『謡曲集』上巻△邯鄲▽（新題）を参考に、求道の旅の設定を作者の構想として考えてみたい。

△邯鄲▽において、求道の旅を志す主人公は、旅宿の夢に栄華の極みを見つくり、結局それが悟りの契機となるという形で、本来の旅程を消化することなく、求道の旅の目的は果たされる。このプロットを、求道の旅の志・その挫折・結果としての仏道の成就、と整

理してみると、よく似た構想の能に△春日龍神▽を挙げることが出来よう。△春日龍神▽においては、仏跡巡礼のため入唐渡天を志す明恵上人が、暇乞いに春日明神に参詣すると、龍神が顕れ奇瑞を示し、春日の地こそ仏跡であるとして、上人の求道の旅を阻止するが、龍神が春日の地を仏跡として展開して見せる奇瑞によって、上人の仏跡巡礼の志は結果的には満たされることになる。無論、△邯鄲▽と△春日龍神▽を比せば、後者は出典からして仏教説話であり、仏教色の濃度には大差がある上、求道の旅の主人公も、△邯鄲▽ではシテ、△春日龍神▽ではワキであることをはじめ、曲趣はかなり異なる。しかし、右に述べたような、求道の旅のモチーフから見た場合、両者のプロットは近似しているのである。また、△邯鄲▽では不思議な枕の見せる黄粱一炊の夢の形で、△春日龍神▽では龍神の繰り広げる奇瑞の形で、両者ともに、挫折する求道の旅の代償が補填されるが、これらの夢や奇瑞の場面こそが、それぞれの曲の最大の

見せ場として構築されるという構造をも同じくしていると言えよう。

△春日龍神▽は、近年、伊藤氏により禪竹作説が提唱され（「禪竹の能」、『謡曲雜記』所収）、筆者も伊藤氏の驥尾に付し禪竹作品として考察を試みたことがある（「龍神物の能の成立―金春禪竹の関与の可能性をめぐって―」、『中世文学』第37号）。△邯鄲▽については、香西氏は世阿弥作説を唱えられたが（前掲「邯鄲―作者と本説」）、近年では世阿弥もしくはその周辺の作者の手になるであろうというラインは動かないものの、作者未詳の扱いである（伊藤氏、前掲『謡曲集』△邯鄲▽解題）。△春日龍神▽とプロットを同じくする△邯鄲▽もまた、禪竹の作品であった可能性は、世阿弥周辺の作者という点からも、検討に値するものであらうと思われる。

△邯鄲▽同様に、本説そのものには仏教色が皆無であるにもかかわらず、作者の構想として仏教色を付与されたことの明確な作品に、禪竹作△鍾馗▽がある。△鍾馗▽に付与された仏教色のあり方については、かつて論じたことがあるが（前掲、拙稿「龍神物の能の成立」）、そこには禪竹の傾倒した法華経の受容という特色が見られた。また、禪竹作△芭蕉▽の場合は、作品の構想自体、本説を大幅に脚色したものであり、そのポイントは、草

木成仏説を中心とする天台本覚思想による法華経説との融合にあった(伊藤氏、『謡曲集』下巻〈芭蕉〉解題)。その点、△邯鄲▽は具體的な仏教説の影響は見られず、どちらかと言えば、伊藤氏の御指摘(△邯鄲▽夢の世ぞと悟り得て―、『謡曲雑記』)の通り、伝統的な仏教的無常感と解しうる程度の仏教色である。この点が、法華経の利用に特徴のある△芭蕉▽△鍾馗▽とは異なる。

禅竹の『歌舞髓脳記』は第四雑躰に△邯鄲▽を「妙花風 高山のごとし」と評し、和漢の詩歌二首を引く。

世をそむく山のみなみの松かぜにこけのころもや夜さむなるらん

暮年客鬢蹉跎冷 秋日頭陀道路徐

前者は「世をそむく」「こけのころも」、後者は「頭陀」の仏教語が使用され、ともに仏教的述懐を歌う点に注目したい。禅竹も△邯鄲▽をそのような曲と理解していたことがわかる。妙花風は世阿弥の九位説における最高位である。表章氏は、『歌舞髓脳記』について、「歌道と縁の深い曲に九位の上三花を配当する傾向」が顕著であることを指摘されている(世阿弥作の△敷島▽と△吉野西行▽

の行方)、『能楽史新考(一)』所収)。歌道好みの禅竹が、『歌舞髓脳記』において歌道とは無縁であるにもかかわらず妙花風の評価を

与えた唯一の曲が△邯鄲▽であることは注目に値する。あるいは、△邯鄲▽の持つ仏教的無常感のテーマに、禅竹が高い評価を与えたとも考えられよう。

△邯鄲▽が禅竹にとつて大事の能であったらしいことが窺えるのは、『六輪一露之記』宗沆跋文、『六輪一露之記注』に見える

邯鄲旅客栄花枕 江口美人歌舞舟

の頌である。宗沆跋文では「這是家傳真仏法」の句が、『六輪一露之記注』では

とし月は枕にすぐる夢の世の うつるも
しらぬ水のうきふね

の和歌が、それぞれ後に付加されている。頌は宗沆の手になるものであろうが、『六輪一露之記注』所載の和歌は禅竹自身の詠作であった可能性が高いと思われる。いずれにせよ、頌・和歌双方に、△邯鄲▽をいわば釈教的な能として享受する理解が見られる。

△邯鄲▽の作者の問題はさておき、△邯鄲▽を禅竹が高く評価していたことは間違いない。△邯鄲▽の手法が禅竹作△春日龍神▽△鍾馗▽と相通じるものであること、禅竹に△楊貴妃▽△芭蕉▽△鍾馗▽といった中国種の作品のあることなどからも、禅竹作品を考える上で、△邯鄲▽の意味は非常に大きいと言えよう。

(大妻女子大学短期大学部非常勤講師)